

88 誌上発表 若山健海と『種痘人名録』について

大西 雄二

大西医院

痘瘡は上代時代以来、日本人を脅かしつづけてきた。それが種痘の普及によって、予防が可能になった。防疫の確立には種々の困難があった。障害は封建制度に由来するものであり、統一的な防疫体制を確立することができなかった。

1744（延享元）年、中国から、人痘種法が伝えられた。痘瘡にかかった人の皮膚のかさぶたを擦りつぶし、これを鼻腔から肺に吸入し発病を予防する方法であった。この方法は文化・文政時代、わが国で盛んに行われた。九州では大村藩医や秋月藩医緒方春朔らは、この方法を完成させた。

牛痘種法は、1848（嘉永元）年、オランダの医師モーニックによって伝えられた。従来の方法に比べ副作用が少なく、効果が良かった。

若山健海は、歌人牧水の祖父である。1811（文化8）年、現在の埼玉県所沢市に生まれた。幼くして父を亡くし、母は再婚。孤児となり江戸の薬屋に奉公し漢学を学び、1831（天保2年）長崎に行き、蘭学と西洋医学を学んだ。1836（天保7）年26歳の時来県し、坪谷村に開業した。3年後の1839（天保10）年には言論弾圧の「蛮社の獄」が起こっている。時代は幕末の動乱期であり蘭学への規制は強かった。

1849（嘉永2）年長崎で牛痘種法をいち早く学んだ。1850（嘉永3）年3月6日、長男立蔵らに種痘を施した。わが国では最初の時期の牛痘種痘であり、医学界の先覚者の一人である。交通不便で文化の伝播も極めて遅かった時代に、僅かに3年目に早くもこの地方にいきたった。

261名の、種痘を施した人名を記した『種痘人名録』が残っている。筆跡は若山健海である。牛痘種法は嘉永2年を皮切りに安政、文久、慶応年間と行われ、地域は（現）宮崎市はじめ広い範囲に及ぶ。この時期の名簿は皆無で医史上『種痘人名録』の希少性は特筆すべきである。

『種痘人名録』

種痘 Koepok 伝嘉永西初春上旬到崎陽蘭人 Mohnike 君為師得是術而歸干宮崎施之連名 三月六日福島退菴粹理一郎、若山健海粹立造……。

1943（昭和19）年、牧水の高弟によって発見された。

健海及び『種痘人名録』について考察する。

何故、日向（宮崎）のそれも草深い坪谷に来たのか？

諸説あるが判然としない。牧水は「何かさうした人に知られぬ山の中へ隠れ度いか又隠れねばならぬ必要かがあって引っ込んだものに相違ない」（祖父の事）と書いている。封建制のなかで埼玉から自由に国内を移動し研鑽を積む機会を得たことは驚きである。

何故、これほど早く牛痘種法を実施できたか？

健海は当時蘭学への規制が厳しい時代のなかで最新医学のオランダ医学を学び造詣を深めた。いち早く牛痘種法の効果を確信した開明性があった。時代の変革期に医師としての革新性、進取性があった。

何故、一般庶民にこれほど多数実施できたか？

藩の意向が及び難い地方で自由な診療が可能であった。医療に対しては医師や民衆に封建制の閉鎖性や守旧性に捉われないうところがあった。そして健海にはその地の人々に医療の恩恵を施す強い意志があった。

健海に我が国の変革期に闊達に生きた姿を見る。そして健海には土着の人間とは違う「異邦人意識」が根底にあった。

孫の国民歌人若山牧水の歌風には「あくがれ」（いる所を離れて彷徨う）が基調にある。健海と牧水に血脈を感じる。